

2日目の午後、「学びあい・育ちあいの地域・産業づくりの視座－池上惇『学習社会の創造』書評会」が開かれた。報告者と論題は次の通り。

1. 十名直喜：「書評 池上惇『学習社会の創造』」
2. 中谷武雄：「‘There is no wealth but life’と文化資本－池上惇『学習社会の創造』をめぐって」
3. 冨澤公子：「池上惇先生と学生との対話：『学習社会の構築』の講義を聞いた学生たちの授業前と授業後の変化」
4. 白石智宙：「財政循環の理論と実践」（博士論文内容の紹介）
5. 池上惇「書評・コメント等へのリプライ」

以下、各報告を簡単にまとめよう。

1. 十名直喜氏は、最初に、本書は、アメリカで出版された同名の書物（Creating a Learning Society: by Joseph E. Stiglitz and Bruce C. Greenwald, 2015）とはまた違った、新たな日本流の学習社会構想を提示したものであるとし、半世紀を超える著者の研究成果とそのエキスを体系的に盛り込まれていると述べた。

次に、池上先生の同書の全体を概括しながら、論点を提示した。

- ①『資本論』に書かれているイギリス工場査察官の労働日研究に注目し、工場立法の歴史的意義、人間の全面発達の可能性を展望しているが、カール・マルクスにもっと光を当てて良いのではないか？
- ②二宮尊徳の「仕法」を軸とする政策論・実践論を高く評価し、これを「信託財産システムによる地域づくり」と捉えているが、信託システムにおいて問われるのは、適切な運用と管理を図るという経営の視点なのではないか。

最後に、文化資本の経営の視点が重要であると指摘する共に、知的な運動とみずみずしい感性が息づき、米寿を前にしての著書とはとても思えない力感あふれる作品であると述べて締めくくった。

2. 中谷武雄氏の報告は、ラスキンの‘There is no wealth but life. Life including all its powers of loves, of joy and of admiration. That country is the richest which nourishes the greatest number of noble and happy human being; that man is richest who, having perfected functions of his own life to the utmost, has also the widest helpful influence, both personal, and by means of his possessions, over the lives of others’に込められた意味について、主に、池上先生の到達点を河上肇の訳と比較した。池上先生は、「ラスキンの生とは、人が培ってきた、伝統や習慣を継承しつつ、身につけ、創造的発展を生み出す原動力を獲得することであっ

た。」(294 ページ)と述べている。そして、上述の英文 2 つめの 'life' を「文化資本 (生)」と訳している。

3. 立命館大学の経済学部の学生が対象の教養科目で、池上先生がゲストスピーカーとして ZOOM で講義をされた。学生に事前と事後のアンケート結果を M-GTA 分析を使って分析したものの報告であった。「講義からの学び」には、①物事を良いように考え期待をもって行動する、②学び：自分の可能性を信じ、挑戦し続ける、③学習社会を作れば余暇に使う時間が増えて幸福度の増加につながる、④よりよい社会の形成は自然や伝統文化に目を向けることがあり、「印象に残った言葉」には、①個性の差異を理解し生きる、②何でも調べてやってみる、③困ったら本を書いたらよい、④社会は良くなっている、⑤誠実に自分を偽らずに生きるという文言があった。池上先生は楽観的だという指摘もあった。

4. 白石智宙氏の博士論文の発表があった。これまで多くの人が述べてきた「地域内経済循環」論をベースにしなが、新たに「地域の財政循環」について理論的かつ実証的に論じた高く評価できる論文であると司会者は考える。

5. 池上先生は、十名氏の「カール・マルクスにもっと光を」という問題提起に対して、工場監督官は現場主義・実践主義であって、①労働日を短縮する工場法の立法に大きく貢献したこと、②その法律が労働者階級の市民的自立、人権の基盤、すなわち国家を制御する市民の力を醸成するのに貢献したこと、③経営者と労働者はともに疎外されていて、生存競争と金のことしか頭になかったのを、人間に戻る機会を提供し、社会改良の余地を生み出したこと、④マルクスのユートピア批判には限界があり、法律を作った人をもっと評価すべきで、グラムシも市民社会がないと革命ができないと言っている、と述べた。

また、学生の楽観的であるという感想について、法律を変える努力が大事で、例えば労働者協同組合についての法律が昨年制定され、障害者の事業活動に展望がもてるようになった。過労死についても森岡孝二さんが活躍して超過勤務等を規制する立法が行われた。法律というのは、自由に議論できる場を提供していると述べた。

時間のなかで、最後に、「私は国家にあまり期待しておらず、地域に期待している」と述べた。地域こそが事業活動と自治の単位で、成功すれば財政の改善も見込める。

この分科会を全体としてまとめるのは至難の業であるが、市民大学院の講義で「学習社会論」を開講し、池上先生の著書をじっくりと読む機会を持つので、そこでも改めて議論をしたいと思う。